

はじめて

「心と心のかよい合うまち」都市宣言をし
七四委員会（人口千人にひとりの代表が集ま
って市政に提言をする）・シルバー人材セン
ター・能力銀行・婦人懇話会などユニークな
発想で市民参加の市政に取りくんている磐田
市に、山内市長をお訪ねしました。
—— 公民館も施設が立派でしかも使用料無料
など、力を注いでいらつしやいますね——
♥いろいろな人が集まるコミュニケーションの
場として、小学校単位に一館を目ざしていま



己長 克市 内田 山磐

す。国の基準にプラスして、カギツ子の為の
部屋・お年寄の憩いの部屋・屋内体育館やゲ
ートボール場を併設している所もあります。
—— 現代の女性について一言 ——

♥最近女性が美しくなりましたね、外見的に
ですが。女性の果す役目には、美の表現とい
うこともあるでしょうから大歓迎ですが。

それに、私も夫婦も年をとってきたので
特に感じるのですが、生きがいのある人生を
送るには、若い頃からいい友人をたくさんつ
くっておくことですね。子どもはやがて離れ
てゆく存在ですから、特に女性は、横の友達
関係が大切だと思います。

◆暇ができたなら夫婦で旅でもという言葉から、
人と人との繋がりを大切にする山内市政の心
が伝わるお話しぶりでした。編集員中浜美也子 ◆

静岡雙葉高校はカトリックの精神にもとづ
いて、中学からの一環した女子教育を行い、
昨年創立八十周年を迎えました。本県高等学
校では数少ない女性校長のおひとりであらつ
しやる伊藤明子校長をお訪ねしました。
—— 女子校でしかも県内トップクラスの進学
校でもあられるわけですが教育方針は——
♥教育の目的は、人を幸せにすることだと思
いますから、生徒には、与えられた能力は自
分のためだけではなく人々のために、と教え
ています。進学指導もそういった観点から行
っています。

—— 女性の生き方と家庭科教育について——
♥それぞれその人が選んだ生き方があるであ
り論いいんですが、愛をはぐくみ育てる場所は



伊藤明子 雙葉高校校長

まず家庭だろうと思います。子どもが生まれ
たら、ある時期お母さんは全力で子育てして
ほしい、その意味で家庭科教育も人間愛の教
育と心得ております。

◆インタビューを終えて——「私は直接神に仕
える人生を選びました」とおっしゃる伊藤先生
は、修道女として校長といういかめしい肩書
きには似つかわしくないザックバランスなお人
柄でした。編集員 大石定子 ◆

子どもと親のコミュニケーション
《手作りおやつ・ドーナツの会》

浜松市の西部公民館で学んだ五つのグループから約40人の有志が集まって、五十七年に発足。

子どものおやつは、出来あいの物ではなく愛情込めた手作りで、をモットーに、おやつの研究や料理講習会を開いて、ボランティア活動を続けている。

同公民館で月一回、定期的に開く「手作りおやつ教室」のほか、夏休みには、「子どもおやつ作り教室」を開いて、お母さんにも子ども達にも、大変よろこばれている。

今後は、お年寄りのための教室もと計画はふくらみ、とても意欲的。ドーナツの輪は、親と子、人々との心の輪、の意をこめている。

連絡先 浜松市鴨江3の80の10

電話〇五三四〇一〇八五

代表者 片桐恒子



過疎の地をささえる文集「やまめ」
《春野町・胡桃平婦人会》

袋井市から北へ40キロ、春野町の南東部、山深い斜面に二十二軒の家が点在している。胡桃平は、お茶と椎茸の村である。

この地に生まれ、あるいは嫁にきた人々の心のささえとなってきた文集「やまめ」は、昭和37年から脈々と22年間、代々の婦人会員の手によって受けつがれ、今年32号を数える。夏まつりの夜店・こんにやくづくり、など地域の行事をささえ、数少なくなつた子ども達にすこしでも楽しい思い出を、と母親としても会員達は知恵をしばっている。

人口60人余りの胡桃平にとつて、地域の連帯の要として婦人会の果たす役割は、はかり知れなく大きい。

連絡先 周智郡春野町胡桃平338の2

電話〇五三九八〇〇五八三

代表者 船見玉江



テレビを消してこつちを向いて
《南部おはなし文庫》

幼い日に味わつた昔ばなしのぬくもりを、現代つ子にも味わせたい、という童話や昔話の好きな主婦八人の思いが実つて、五十六年に会が発生した。

毎月第二火曜日が定例会で、この日に、学習をしたり、お話を選定したりする。二ヶ月に一度、第三土曜日の午後、市の南部公民館で、地域の子ども達に「お話ローソク」を開く。手づくりの紙しばいもあり、会員一人ひとりが研究に余念がない。

この他、施設を訪問したり、障害者の仲間が開くバザー・どんこ市に出演したりして、その活動は地域にしっかりと根づいている。

連絡先 静岡市小鹿二丁目31の27

電話〇五四一〇〇三七四三

代表者 田村まさ子



婦人の手で地域の福祉を
《松崎町・ひまわり会》

子育ての終わった四・五十代の気の合った主婦の集まりで、五十年に発足、現在会員42名。

当初は施設の慰問が主だったが、その後活動内容がふくらみ、七十歳以上の独り暮らし老人(約90人)への月一回の給食と訪問活動・公共施設や河川・海岸の清掃・講演や映画による啓発活動などを行っている。

特に、独り暮らし老人への給食サービスは好評だ。会員が海・山の幸を持ちよつて作る食事は、愛情という栄養がたっぷり。

地域の福祉組織とがっちりスクラムを組み、ひまわりという名のおり明るいカラーと、会員一人ひとりの真摯なボランティア精神が印象的である。

連絡先 賀茂郡松崎町江奈27の2の1

電話〇五五八四二〇二二七

代表者 石田節子





本県の父子家庭の数は、2572世帯、(昭和55年国勢調査) 全世帯数に対する割合は、0.28%で、ほぼ千軒に三軒の割合ということになります。

これは、沖縄・高知・北海道・大阪・青森と和歌山について、全国第七位の発生率です。

どんな理由で父子家庭になったのかは、この統計からだけではわかりませんが、一昔前のように死別によるものばかりではなく、生別によって父子家庭になるケースがふえてきているのは確かです。

A君の場合

A君は十六歳。まだ幼さの残る、伏し目がちなまなざしが寂しげな中学を出たての男の子で、家族は病弱で生活保護を受けている無職の父親と兄三人、異父姉二人です。

彼は、父親が事業に失敗して身を寄せていた北海道の母親の実家で、昭和四十三年に生まれました。

しかしそこが居づらかったのか家族全員で名古屋に転居、その後静岡へ移り住みました。昭和五十一年両親が別居、母親は蒸発、幼なかつた

A君は、異父姉に引き取られ、現在の熱海市にきました。数年後、この異父夫婦と不和になり、母親の元に行ったり、又父親に引き取られたりという生活でした。

静岡で小学校に入学後も、A市、B市、C市を転々とし、本人の意志とは無関係に、まわりの大人達の都合で転居、転校させられてきたのです。

熱海の中学に転校後、すぐ不良グループと接近し、シンナーを吸ったり、他人のバイクを盗んで無免許運転を繰り返したり、気にいらぬ同級生にリンチを加えたり……結局一ヶ月間の少年鑑別所行きとなりました。帰って来た当初はとも反省している様子でしたが、間もなく以前の不良グループとのつき合いが始まり元の生活に戻ってしまっています。

望まれる父子家庭への施策

父子家庭の悩みは、子どもの養育に集約されると言われています。これに対して社会的な援助制度は行きとどいていないのが実情です。

第二、第三のA君をつくらぬために、父子家庭の子どもの視点に立った施策をまず第一に考えなければならぬと痛感します。



「雇用の分野における男女の機会と待遇の平等」はどうあったらいいのかについて、婦人少年問題審議会婦人労働部会は、昭和53年以来大変な時間とエネルギーを費して検討してきました。

いわばその成果として、本年五月に、「雇用機会均等法案(略称)」を政府案という形で国会に提出しました。結論から言えば、会期も終りに近づいた、七月二十四日に、衆院社会労働委員会でも可決され、二十六日日本会議通過、参議院へ送られました。参議院での審議の時間はないので、継続審議となった、というのが現在の状況です。

すでに報道されているように、この法案については、最後まで労使の意見調整ができて、所詮妥協の産物と言われながら、婦人差別撤廃条約批准のためという錦の御旗をたてた政府労働省が、背水の陣をしいて提案したものです。

しかし、公表された政府案に対する婦人団体や働く婦人の失望は大きく、遅ればせながら世論がわきました。反対の内容は立場により様々ですが、大きく三点に整理できそうです。

す。

一つは、「雇用平等法」という新しい法律を期待していたのが、主として既製の「勤労婦人福祉法」と「労働基準法」の改正という形にすり変っていたという点。

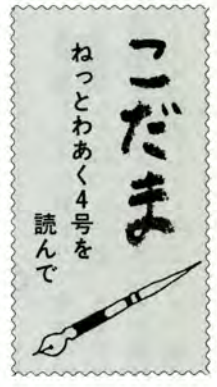
第二点は、就労における我が国の男女差別の最も顕著に現われている場面としての、募集、採用の部分に法の強制力が全く及ばないという点。第三は、平等とのトレードオフという形で、原則として従来の女子保護規定を取りはずす方向が打ち出されている点等です。

その他、法案全体がかもし出している理念に対する批判も見逃せません。

いずれにしても、すでに全雇用労働者の34.6%が女性という現実を直視して、現に表面化している様々な不合理を正すという基本的な姿勢だけは労使双方に求めたいものです。

女性は外の仕事に向かないとか、職業意識が低いとか繰り返し指摘されてきたわけですが、故に女性にポストを与えないという悪循環を断ち切るメスの役割を、私たちは法律に期待してはいたはずですから。





静岡市 芹澤洋子 30代
 家族座談会の大島夫人の迷いに共感を持ちました。主婦の迷いはみな同じなのだ。

森町 鈴木可奈子 40代
 I・N・Sは、低下しつつある家族機能を補強したり、女性の社会参加を可能にするのでは、という期待とは裏腹に、却って受動的で、孤独な人間が多くなるのでは、との危惧を持ちました。

それだけに、積極的に自己開発し、社会参加の努力をしているグループ紹介は有意義だと思えます。

静岡市 桜井則子 30代
 姑一家と同居への話が進行中の主婦です。家族のつながりって、愛情？同情？義務感？それとも、ぶりっ子で？などと考えているところへ、「ねっとわあく」をいただきました。本音を求めたい気持ちには、ちょっと薄めの塩味でした。

磐田市 安西洋子 30代
 「ねっとわあく」はじめて読みました。今、働く婦人にとって、いわゆる「男女雇用機会均等法」のゆくえが大きな関心になっていきます。ぜひ、取りあげて問題提起をしてください。

静岡市 川口昭子 40代
 女だからと言われながら育てられ、青春時代には「男女平等なのに」と義憤を感じて抵抗したのに、自分の子どもには女だからと言って育てている。親から受ける影響力の大きさに今さらながら驚かされ、真の男女平等は、何といっても母親の自覚であると痛感しています。

浜松市 春日康治 30代
 特集「成熟化社会の家族像」は男性の立場から読んで大変考えさせられる内容でした。

初めて読みましたが、官民一体となつて創る情報誌として、内容がバラエティに富んでいて、気軽に読めました。男性読者にも目を通してもらえるように、青少年活動のリーダー等にも配布したらどうでしょうか。

5号の感想をお寄せ下さい
宛先— 県婦人青少年課まで

本の紹介



「おじいさんの台所」 佐橋慶女著
 共働き、単身赴任、独居老人など、男性も「男子厨房に入らず」ではいられない。八十歳をすぎて妻に先立たれたおじいさんが、生活の自立を試みた記
 文芸春秋社 一、〇〇〇円



「子や孫の時代へ何を残すか」 広中和歌子著
 多様性に富む現代社会では、次代のために賢い選択をせまられている。シモーヌ・ペイル、E・ライシャワー等内外の識者十一人と筆者との対談集。
 創知社 一、三〇〇円



講座女性学2「女たちのいま」 女性学研究会編
 流動化しつつある男女の性役割分業。しかし、共に人間らしく生きることのできる新たな役割構造の確立までには、さらに意識の変革が求められる。
 勁草書房 二、〇〇〇円



「女性は進出する」 東京新聞特別取材班編
 近年女性の社会的進出は著しい。だが、理想と現実の隔たりは大きく、特に職場では、女性はいたる所で高い壁につき当たる。その現場レポート。
 ダイヤモンド社 一、二〇〇円



「セカンド・ステージ」 ベティ・フリーダ著
 女性解放運動はセカンド・ステージ(第二期)へ入った。ウトマン・リップの祖、全米女性同盟NOWの創始者である著者は、愛に結ばれた新しい家庭、家族を見直すべきと説く。
 集英社 一、六〇〇円

59年度 編集員紹介

主婦が外に出ると、家族にしわ寄せが行くか、主婦自身の負担がふえるという現実がある。それでもなお、女性の社会参加は必要だと思う。そこを個人的にも、社会的にもどう解決していったらいいのかを考え続けたい。

野次馬根性からの応募が、ホンモノになってしまった。さあ大変、だが、折角のチャンス。やるからには頑張って、魅力ある情報誌にしたい。御多分にもれず、変身願望の主婦の一人だが、これを機に何かをつかみたい。

平穏で安定した生活にどっぷり……徐々に新鮮な感覚が失われてゆくのを感じていた。このマンネリ生活を打破するためにも、目と足と頭をフルに使うと、緊張感を求めて応募。今後の新たなステップにつなげたい。一応、今年の編集長。

知らぬが仏、言わぬが花、の時代は過ぎた。一步を踏み出すきっかけをつくる、そんな情報誌づくりを志して応募。仕事、趣味、地域活動、それぞれチョコット人生に焦りを感じつつ、ライティングを繰り返す毎日です。

子育てもとうに終わり、地域の婦人会の役職もすべて卒業してほっと一息。ともすれば固くなりがちな頭を柔軟にすべく、世の中の事柄を、より広く、深くみつめ直して、そこから、婦人に関わりの深い問題を提起してゆきたい。



比奈地信子(56)
森 町



中浜美也子(36)
磐 田 市



小松寿々代(33)
熱 海 市



大石 定子(37)
静 岡 市



新井 朱実(44)
静 岡 市

女性の社会進出がやかましい中、男と女の役割はおのずから異なる、と思っていたのです。社会進出にばかり目を向けるのではなく、家庭の中に潜在的な力としてとどまることも、又別の意味で評価できるのではないかと考えるのですが。(S.K)

ねっとわあくの編集に携わって五ヶ月。女性学?にはあまり関わりがなかった私にとって、編集会議は悩みの連続だったが、いい勉強の場を与えられたと感謝している。何よりも、取材でのすばらしい人達との新しい出逢いによるこびを感じている。(N.H)

あとがき

何かに熱中せずにはいられない主婦の状況。その価値観は多様だが、それぞれを認め合いながらも、自己の資質向上につながる何かをしたいもの。取材で出会った多くのハッとさせる「人生観」を、一つ一つ紹介することができなかったことが心残り。(M.N)

ひと時代前に較べると、女性の意識は様変わり、生き方は選べるし、自由になった……?話し合いの中から女性を多面的にみるようになった。取材は楽しいのだが、文章にすることの難しさも味わった。(S.O)

婦人のための情報誌「ねっとわあく」

第 5 号

昭和59年 9月

編集・発行 静岡県生活環境部婦人青少年課

〒420 静岡市追手町 9番 6号

☎ <0542> 21-2137

家庭という日常世界から踏み出した第一歩は、予想以上に手応えのあるものでした。

取材、インタビュー、文章を書くこと、中年ボケの頭が少しずつ回転し始めたようです。踏み出してよかった、と思っています。(A.A)